

『カンディード』——〈戦争〉を前にした青年

水林章著

みすず書房 二〇〇五年

イラク戦争におけるアメリカの〈正義〉の自明性が否認されるに至った現在、テロリズムを終焉させるための〈戦争〉自体がテロリズムの一形態であることが白日の下に晒されることになった。水林章氏の『カンディード』——〈戦争〉を前にした青年』は、冒頭でこの現代の戦争に言及し、他国の侵略と現地の人びとの生活の破壊以外の何ものでもない行為を正当化しようとする、アメリカの力の論理を糾弾するエドワード・サイードの言葉を踏まえる形で、一八世紀のフランスで書かれた戦争をめぐるテキストへのアプローチが始められている。イラク戦争を支持するアメリカ国内の声が「七〇パーセント」を占めるという数字を挙げて水林氏が驚きを表明しているように、侵略戦争は必ず自国の行為を是とする国民の多数派の声に支えられて遂行される。しかもこの多数派は当然自国の行為を侵略行為ではなく、正義の実現として受け取るために、それを相対化する〈外部〉の眼差しをもつことは、非力な少数派に自己を置くことになる。日清戦争に始まる日本の帝国主義的な戦争・侵攻も、この多数派の声による正当化を受けて遂行されたが、自由主義者の新渡戸稲造が韓国併合を賛美し、大正デモク

ラシーの担い手となった吉野作造が対華二十一カ条要求の後押しをしたことは、この〈外部〉の眼差しをもつことの困難さを物語っている。国民の大多数は、日本が韓国を領土化し、中国での権益を拡張していくことを自国の〈発展〉として肯定したのであり、しかも最終的に戦争の犠牲となるのは、それに盲目的な是認を与えた当の国民自身であった。

水林氏の捉える『カンディード』は、こうした〈多数派〉の素直さをもった青年を主人公とし、彼が戦争のただ中に投げ込まれ、過酷な経験に遭遇しながら、それを良しとする価値観から脱却していく変容を辿った物語である。「カンディード(Candide)」とは「純真な」という意味をもつ形容詞だが、水林氏はそのラテン語における原義が「白さ」であることから、主人公が外界からの働きかけに対して素直に自己を開くナイーブさに彩られた人物として位置づけられていることを指摘している。そしてこの主人公の名前がはらんだナイーブな素直さがこの作品の鍵をなすことになる。つまりカンディードは、膨大な犠牲者を生み出しながら、それをなお「最善の状態」として肯定する師パングロスの言説を疑いなく受け入れるナイーブさによって、物語の主人公に選ばれていながら、同時にその属性によって、この言説を相対化する眼差しを獲得することになるからである。

したがって『カンディード』のテキストには二つの声と眼差しが交錯しつつ共存することになる。一つは戦争も含む地上の現象のすべてを「最善」として肯定しようとする規範的価値観であり、もう一つはそれを相対化し、空無化していく言葉である。ここに水林氏が『カンディード』に施す分析の眼目があり、

緻密きわまりない読解によつて、この長からぬ一八世紀の物語が、巧みに仕組まれた多声的織物であることを証していく。たとえば第三章に描かれる、ブルガリアとアバリアの軍隊が対峙し合う様相において、「カンディードは哲学者のように震えながら、この英雄的な殺戮の最中、どうにかうまく身を隠した」という一文を取り上げ、そこに内在する二層の価値観が析出される。すなわち「英雄的―殺戮」「哲学者―震える」という組み合わせは、肯定と否定のニュアンスを共在させており、そこに戦争の〈英雄性〉と残酷性、あるいは前者の価値を鼓吹する哲学者の言説とその現実的な無力さが浮上してくるのである。この「哲学者」とは具体的にはカンディードの師であるパンダロスを指すとともに、そのモデルともいうべきライブニッツとそのオプティミズムを暗示し、それに対する異議の提示がこの一文にさりげなく込められているとされる。

こうした叙述に織り込まれる、戦争の〈英雄性〉に対する相対化の方向性が、共同体のなかで維持されてきた価値観を自明のものとして受容する身分制・社团制社会から、国家と直接向き合いうる個人の集合としての社会への移行を示唆することにも、主人公カンディードの変容の伏線として作用することになる。つまり戦争の遂行によつてもたらされる犠牲の大きさが、現実世界の所与性の換喩をなすだけでなく、やはり否認の声を上げねばならない問題性であるという判断を個的におこなっている地点にカンディードが進んでいくであろうことが、前半部分の軍隊の描出に盛り込まれていると見なされるからである。

『カンディード』に対する水林氏の直接的な分析はもっぱら

前半部分に限定されているが、書かれているものを客観的にすくい上げつつ、全体の展望からの演繹性によつて励起されるダイナミズムのなかで明晰な解釈が施されていく叙述は、テクスト分析の規範的な姿を示している。また色彩や人名に込められた含意を探り出していく方法は、評者自身が好むものであるだけに、ひじょうに感興をそそられた。主人公の「カンディード」の含みはかなり自明であるにしても、彼の師のパンダロスの名が「全的に言語的な存在」を意味し、領主のトウンデル・トン・トロンクが「こん畜生」を漂わせるといった指摘は、小説に寓意性を帯びさせる作者の機能を考える上で興味深かった。

若干の不満をいわせていたできれば、水林氏の分析が前半部分に限られているために、そこで示唆される価値観の過渡性を、主人公のカンディードがどのように担い、彼自身の変容がもたらされるかが明瞭に提示されていないように思われる。引用された箇所では二種類の声を共在させ、交錯させているのはあくまでも語り手であり、この段階ではカンディード自身は所与の価値観を相対化する眼差しを発動させていない。ここに主人公の価値観の変容が伏在しているのであれば、彼が戦争の過酷さをくぐり抜けることによつて、それがどのように顕在化していくかが辿られてもよかっただろう。たとえば後半の第二十五章で、カンディードがヴェニスに辿り着いた際のやり取りでも「馬鹿な人間は、大作家のものとなると、何から何までありがたがる。私は、自分のために、本を読むので、自分に役に立つものしか、好きになれません」(丸山熊雄・新倉俊一訳、以下同じ)という現地の貴族の言葉に、カンディードは「何事によらず、自分では、けっして判断を下さぬように、仕込まれて来たから、

この言葉に、すっかり肝をつぶしてしま」うのであり、「世界秩序を正当化し存立せしめている言語的な体制に対する無自覚な服従からの自由を描く」とされる、主体的な判断力を彼が身につけるに至ったようには見え難いのである。叙述にはらまれている二層の声の交錯に対する分析は緻密で強い説得力をもつだけに、主人公自身の行動・言説の変容との照応が押さえられると、より完成度の高い『カンディード』論となったと思われる。しかし「高校生にも分かる」という趣旨をもつ啓蒙性の高いシリーズの一冊として書き下ろされた本書に、それを求めるのは望蜀というものかもしれない。

ところで本書を繙いていて自然に想起されたのは、夏目漱石の初期作品であった。たとえば『坊っちゃん』の主人公は、その呼称が示すようにまさに「カンディード」の人物にほかならない。『坊っちゃん』に直接戦争の姿は現われないが、以前本誌に書いたことがあるように、この作品は日清戦争、三国干渉、日露戦争という、明治日本が経験する帝国主義的な歩みを映し出しており、主人公が「坊っちゃん」であることには、明らかに「外発的」に戦争に駆り立てられていく日本の近代国家としての未熟さが含意されていた。ヴォルテールの世界とは逆に、坊っちゃんが「カンディード」であることは、戦争の遂行者となることにほかならず、したがって日本が「成熟」を遂げることは戦争の超克を意味することになる。漱石はその願いを『こゝろ』に込めて、坊っちゃんの遠い後身である「先生」を「明治の精神」に殉死させたが、結局漱石の死後も日本は「坊っちゃん」として戦争の遂行者でありつづけた。『カンディード』においても、主人公の造形は必ずしも彼が所与の価値観から超

脱することを明確化していなかったが、それを前半部分の叙述から括り取ろうとする筆致に、むしろ水林氏自身の強い希求を見ることができるのである。

(柴田勝二)